KARAKURI

記憶のどこかにある赤い服の人形のせいか、大人になっても人形には興味を持っていたのですが、人形が好きだなどというと白い目で見られるので、そのような言動は控えていました。しかしチャンスがあれば一度辻村ジュサブロー氏、四谷シモン氏、与勇輝氏などの人形を見てみたいとは思っていました。そんな折　母親が友人と銀座の松屋で開かれていた与氏の人形展に行き　買ってきた写真集を見て、どうしても実物を見たくなり意を決して行くことにしました。ある程度は覚悟して行ったのですが、その場違いな雰囲気に圧倒され落ち着いて見ることもできませんでした。しかし人形たちは一目見れば静止したまま生きていることがわかりました。こういうことを言うので白い目で見られるのはわかっているのですが、本当かなと少しでも思っていただけた方は、川口湖畔にできた与氏の人形を常設展示しているミューズ館を訪ねてみることをお勧めします。ここはデパートの人形展のように、まるでアイドルのグルーピーのようなオバサマ方に邪魔されることもなく、静かに人形と向き合うことができます。ちょっと話がそれてしまいましたが、その人形展以来、自分でも何とか人形を作ってみたいと思うようになっていました。

そんなある日、NHK 教育テレビの趣味講座で与氏がじきじきに人形製作の講座を行うことを知り、早速テキストを買いビデオを用意し、週に一度の講座を楽しみに欠かさず見たのは言うまでもありません。と同時に材料を探し回って集めすぐに作り始めました。

油土で頭部の原型を作り、石膏で型を取り、型の内側から張り子紙を重ねるように貼り、張り子の顔を作る。体はテキストから型紙を写し取り、天竺に型を取って裁断し、部屋の片隅で埃をかぶっていた足踏み式ミシンを引っぱり出してきて縫い合わせ、木毛を詰める。手足と頭を取り付けて、顔には染粉で肌色に染めたメリヤスをコテで貼る。靴は張り子の上に皮を貼り細く切った紐を通す。服は型紙をもとに布を裁断し、シャツ、ズボン、ジャケットと人の着る服と同じ手順で縫っていく。最後に　染粉で染めた糸を髪の毛のように貼っていき、髪をカットし目を描きいれて完成となる。そんな調子でテキストに載っていた二体の習作は夢中で作ったのでした。

ほとんどゼロからすべてのものを作り出していく面白さにはまってしまい、その後数年間に何体かの人形を作っては壊したりということを繰り返していましたが、とても自分にはあんな生きているような人形は作れそうもないということに気がつき、それならばいっそ動かしてみたらと考えました。そこで思いついたのがからくり人形だったのですが、か

らくり人形といってもイメージだけで、具体的にどのようなものかわからずとりあえず資料を探してみようと図書館や本屋をまわってみました。まだインターネットなどという便利なものはなく、今のようなロボットブームでからくり人形がいろいろな場所で紹介される以前で、茶運人形の外観や簡単な動きを説明したものや、飛騨高山の山車からくりが載っているものぐらいしかありませんでした。そんな中ちょっと古い本なのですが「ものと人間の文化史」というシリーズの中に「からくり」（立川昭二著、法政大学出版局）という本を見つけました。この本には日本のからくり人形を巡る話や、Automata の話、そして江戸時代に細川頼直によって書かれた「機巧図彙」の話が載っており、また「機巧図彙」に基づく茶運人形の復元の話も載っていました。江戸時代にからくりについて書かれた本があることなど初めて知り驚くとともに、大変感動しました。特に茶運人形は、動力を内蔵し、速度と走行軌跡を制御しながら走行するという現在のロボットにも通じる機能を最もシンプルな形で具現しているようにも思え、ぜひ自分でも作りたいと思ったのですが、All 木製のその人形を作るには、それなりの木工技術と工具等が要るように思え実行できませんでした。そこで　自分の作った人形にモーターやギヤを組み込んで動かしてみたりしていたのですが、それでは結局部品を買ってきて組み合わせているだけで、布人形を作るときのようなゼロからすべてを作るような感激は味わえませんでした。

　その後　人形作りからフィギュアへと発展し、ワンフェスにも出展しようなどと画策したのですが、版権がおりず断念しました。そんなことをしているうちに何故かフィギュアが大ブレークし、オタク系の趣味がメジャーになっていくにつれ、逆に僕はフィギュアから離れていってしまいました。昨今の海洋堂のフィギュアにコレクターが群がっている様子には隔世の感があります。このようにして僕は人形作りからも遠ざかってしまったのですが、何かをゼロから作り出す面白さと、いつかはからくり人形を作ってみたいという思いだけが残ったのでした。

写真の説明

写真１：ピエロ

NHK教育テレビで与勇輝先生（私にとっては勝手ながら人形作りの先生なのです）が人形作りの講座を行ったときの、習作として作ったものです。

写真２：桜木花道

よくいつも見ていたアニメのスラムダンクの主人公「桜木花道」をフルスク

ラッチで作ったものです。エンディングテーマだった、ＷＡＮＤＳの「世界が終わるまでは」が好きで、ＣＤを買ったときについてきたイラストをもとに作りました。